児童養護施設における性的マイノリティの子どもへの職員の対応について

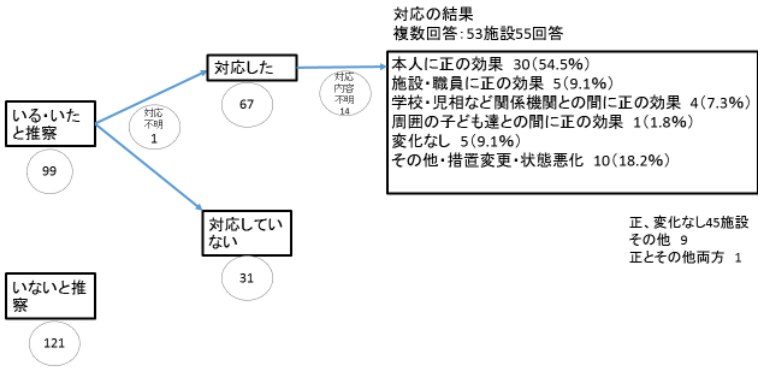
児童養護施設 LGBT 児童対応調査の結果から（２）

○静岡大学　白井千晶
金沢大学　岩本健良
埼玉大学　渡辺大輔
レインボーフォスターケア　藤めぐみ

１．目的と調査概要

児童養護施設における職員の性的マイノリティの子どもへの対応が児童養護施設にどのような影響を与えるか、質的に分析する。2016 年 11 月～12 月実施の児童養護施設調査データを使用する。調査概要は岩本報告に代える。

２．結果



「一般的」「典型的」な形とは違う「性的マイノリティの児童（もしくはそうだと推察される児童）」がいた経験がある施設は全体の約半数、45.0%だったが、うち 68.4%は、そうしたケースに「対応したことがある」と回答した。「対応したことがない」理由は、「本人が相談してこなかったから」「対応しなくても問題はないと思った」が４割前後だったが、「どう対応していいかわからなかった」も２割弱だった（複数回答）。対応の内容は「職員会議」「職員が子どもの相談に応じた」「本人の希望に応じた」が４～５割と割合が高く、そのほかに「学校に伝えた」「外部に相談した」も３割前後あった。対応した結果を自由記述で求めたが、その内容を施設（職員）への影響、効果に着目してアフターコードしたところ、図中に示したように、過半が「本人に正の効果」があったと記述した回答だった。その内容は、「安心感が子どもの中に生まれた」「職員に対して、前よりオープンに話をするようになった」などである。「施設・職員に正の効果」は、「職員が理解することで、対応にゆとりを持てた」などである。「学校・児相など関係機関との間に正の効果」は、「学校側の理解を得られた」など、「周囲の子ども達との間に正の効果」は「周りの児童も理解してくれた」などである。変化がない、措置変更になった、本人の苦しい状態が改善していない、などもあった。

調査票最後に求めた自由記述では、実際に性的マイノリティの子どもがいる／いた経験があり、対応した施設は、対応していない施設よりも自由記述の回答率が高く、「他の児童への理解を求めることが難しく、からかいの対象となってしまうこともある。対象となる児童がいない時から性的マイノリティの教育が必要だ」「学校の理解を得ることのほうが難しい」「職員への意識付けと適切な対応を話し合う土台作りが必要」など、より具体的な回答をする傾向がみられた。

３．結論

調査回答施設は（経験なし、対応なしでも）この課題に関心がある施設である傾向があることが推察されるが、それを考慮してもなお、経験、対応が、子ども本人の相談に応じたり、施設内で協議したりする機会となり、職員の姿勢や環境を見直す契機となってよい循環を生み出すといえるのではないか。

文献　一般社団法人レインボーフォスターケア・岩本健良・白井千晶・渡辺大輔 2017.『「児童養護施設における性的マイノリティ（LGBT）児童の対応に関する調査」報告書』一般社団法人レインボーフォスターケア.（https://rainbowfostercare.jimdo.com/　に詳細版とダイジェスト版を掲載）